

Global Active Learning



目次

はじめに

I スケジュール表

II ブランダイス大学での講義・交流

III ボストン大学での講義

IV 講義での学び - 国によつての価値観の違い

V 周辺観光

振り返り

はじめに

武石 智香子

2006年度を開始年度とする様々な形でのBostonへの学生引率の報告書には、いつも次のようなインシュタインのものとされる言葉を引用してきた: “I never teach my pupils, I only provide the conditions in which they can learn.” しかしながら今年度はこの金言が通用しないいくつかの課題が事前授業の段階から待ち受けていた。

本科目の狙いは、中央大学の全学的教育プログラムであるグローバルFLPで本科目を履修した学生と、米国のブランダイス大学の日本語学科の学生とがシラバスを合わせ、日本に興味があり日本語を副専攻とする様々な分野のブランダイス大学の学生と、米国に興味があり英語で学びたい様々な学部の中中央大学の学生が、対等な関係で相互に異文化理解を深めることにある。

一方で米国への長期留学では、留学する側が受け入れ国の文化の「当たり前」を受け入れる一方的な順応になりがちである。他方、外国人のために設計された短期（語学）留学の多くは、米国の大学において正規学生が不在の期間もしくは時間帯に実施されるため、大学の正規の授業を通して大学生同士の異文化理解を行うことは難しい。そこで考えられたのが、米国の授業開始2週目以降、日本がまだ夏休みというごく限定された期間（9月中旬）にBoston近郊のブランダイス大学の授業に対面で参加して、その後のオンラインの共同作業につなげるという形であった。企画として狙いは良かったが、実際の科目の運用は容易ではない。

ブランダイス大学で授業の曜日・コマ位置が通達されるのは新年度の始まる頃、9月に入る直前である。たとえば本科目のカウンターパート科目である日本語120Aでいえば、2021年度と2022年度は火・木だったが、2023年度になって月・水となった。さらに秋学期のグローバル遠隔ラーニングでのオンライン協同作業には時差の壁もある。これらの構造的なハードルに加えて、物価の違い、円安、日米の「当たり前」の期待値の違い、Covidによって失われた大切な何か…言葉には尽くしがたい、今年度だからこそ感じるチャレンジもいくつかあった年であった。

さらに個人的な事情でいえば、学部と大学院に、Covid以前の海外引率科目、さらにはCovid期に立ち上げたAI・データサイエンス科目がフルスペックで加わり、さらに副学長業務、本来最優先すべき研究…と、明らかに今年度の業務量は毎日を圧迫し、自身のキャパを超えて不本意ながら各所にしわ寄せが出てしまった。

そういった私の能力の限界にも拘わらず、いつもながら中央大学を大歓迎してくれたブランダイス大学のみなさん、科目運営を支えてくれている全学連携教育機構事務室には感謝の言葉もない。ブランダイス大学は日米交流の寄附金を獲得し、最近になって東京大学、早稲田大学、慶応大学と協定関係を結んでいる。そこに中央大学を加えたいとってくれる人もいる。このように人々に恵まれた学生たちが、この機会をなんらかポジティブなきっかけとして自らの学びに生かしてくれることを祈るばかりである。

2023年9月

I スケジュール表

Sep.10th	Sun	02:00 arrive at the Airbnb
11th	Mon	11:55 - 13:30 campus tour (Brandeis University) 13:30 - 14:30 lunch time 14:00 - 16:00 campus tour 16:05 - 17:25 joint class with Brandeis students (Self Introduction) 17:30 - 19:00 welcom party 22:00. learning about Rousseau
12 th	Tue	09:30 - 11:00. Nationalism and Globalization (Brandeis Uni.) 15:30 - 18:15. Globalization of Nationalism (Boston Uni.)
13 th	Wed	13:00 - 14:00. Lunch with Brandeis students 14:00 - 16:00. Rose Art Museum 16:05 - 17:25. Joint Class (Brandeis Uni.)
14 th	Thur	11:00 - 13:00. Boston Tea Party Museum 14:00 - 15:00. Lunch 15:00 - 18:00. Walking around MIT and Harvard University 18:30 - Dinner
15 th	Fri	11:15 - 14:00. Joint Class on Sociology of Culture (Boston Uni) 14:00 - 18:00. Newbury Street with Brandeis students
16 th	Sat	Free
17 th	Sun	09:00 - 11:00. Aquarium 11:00 - 13:30 lunch 14:00 - 17:00. Museum (Museum of Art) 18:00 - 20:00. Dinner
18 th	Mon	05:00 leave Airbnb and heading to the airport

Ⅱ ブランダイス大学での交流、講義

ブランダイス大学での交流では、人の温かさに触れると同時に良い刺激を得ることが出来ました。

ボストンでの最初の交流がブランダイス大学の学生であったため、私はもちろんのこと全員緊張気味でした。しかしブランダイスの学生は緊張している私たちに優しく声をかけてくださり、仲良くなるのにあまり時間はかかりませんでした。

9/11にはキャンパスツアーをしていただき、キャンパスの全体の説明をしながら、教室、学食、寮、図書館、教会などに連れて行ってもらいました。中央大学の多摩キャンパスは都内の大学の中では広い方だと思いますが、ブランダイス大学は中央大学より比べ物にならないほど広く、自然が豊かでした。またウェルカムパーティーでは、学生の出身国のお菓子を用意していただきました。中国、韓国、アメリカ、ユダヤのお菓子があり、お菓子からも文化の違いを感じることが出来ました。9/13にはキャンパス内にある美術館に行き、スタッフの方に案内していただきました。ユダヤ教の学校であるため、日本の美術館では珍しい宗教関連の展示がありました。

ブランダイスの日本語学科の学生とコミュニケーションをとる際には、こちらが英語で話してブランダイスの学生が日本語で話すという形でした。まだ2、3年しか勉強していないのに日本語での会話が完璧で、英語を6年以上勉強してきた私たちがまだ少ししか話せないこの現状に大きなショックを受けました。3、4ヶ国語話せるという人が沢山いて、それを当たり前だと感じている方が多かったです。現地の学生から話す練習をしないと話せるようにならない、日本人はシャイすぎると指摘を受けました。確かに現地の学生は日本人がいなくとも、現地の学生同士で日本語を話しているのです。日本では日本人同士で英語を話すことを恥ずかしく感じる人が多いのではないかと思います。英語を話せるようになりたいと思うのであれば、環境のせいにせず、積極的に英語を話す機会を増やすことが大事なのだと再確認しました。

ブランダイス大学での講義では国ごとの文化の違いについて比較を行いました。参加したクラスの生徒のバックグラウンドはアメリカ、中国、そして私たち日本の3か国に分けられます。それぞれ自国の文化の特徴を挙げたところ、アメリカは自由・平等・自立といったワードを挙げ、中国は尊厳・承認・国家の力とい

たワードが挙げられました。私たちが日本について述べたことは、謙虚・協調性・伝統などです。この講義を受けて、それぞれの国がそれぞれの特徴を持っていて、それはそこに住む人たちが作り上げたものであり、どれが良い・悪いということはないと学びました。これは今までも様々な授業で学んできたことであり、頭の中では理解しているつもりでした。しかし私は「日本人は」と一括りに判断されることに違和感を感じていました。日本人だからと言って謙虚であるかは人によるし、人種によって区別するのはグローバル化が進んでいる時代において的外れだと思っていたからです。それと同時に人々の性質は住んでいる国に大きな影響を受けていると感じている部分もありました。そのためこの講義で実際に自分とは全く違うバックグラウンドを持つ学生たちと議論することで“異文化”の意味を整理するいい機会となりました。まだうまく言語化することはできませんが、人々が共同生活する上で理想やルールを築く必要があり、それが国ごとに異なるのだと理解しました。これから半年ブランダイス大学の学生と交流する機会を活かし、国ごとの文化の違いについてもっと言語化できるようにしたいと思います。

Ⅲ ボストン大学での講義

ボストン大学ではブランダイス大学での講義と異なり、「ナショナリズム」に関する一般の講義に参加させていただきました。もちろん日本語は通じず、現地の大学生のスピーキングに圧倒されるばかりでしたが、気さくに話しかけてくださったりわからないところを教えてください、とても心優しい先生と学生の皆さんのおかげで有意義な時間を過ごすことができました。

特に印象に残っているのは、自分の所属する国が好きか、そして国を誇れるか、という質問です。日本人は国のために、といった考え方をあまりしませんが、私たち日本人は全員が日本を好きと答えました。外国の考え方だと国が好き、という考えは国のために奉仕する、という考えと似ているので、なぜ日本人は日本が好きなのに日本のために、という考えをしないのか疑問に思われたそうです。私個人の意見は、今の現状に満足しているため、国のために尽くさなくてもいいからこのような考え方になっていると思います。国家を脅かされたり消滅の危機に直面した際は、国に献身する考えが生まれると思います。

ボストン大学の授業は、今まで無意識の間に持っていた感情の理由を考え直す素晴らしい機会だったように思います。私たちのあたりまえがあたりまえでないと感じた授業でした。

2回目のボストン大学の講義は、日本人の価値観についての議論から始まりました。事前に自身の理想の価値観と自身が日頃大切にしている価値観についてのアンケートを記入しましたが、ボストン大学の学生と中央大学の学生で結果に大きな差がありました。ボストン大学の学生は2つの価値観が比較的類似した物であることに対し、日本の学生は理想の価値観と日頃大切にしているそれに関連性がなかったのです。これに対して教授は、なぜ理想が分かっているのにそれに近い価値観や行動をできていないのかと問いかけてきました。その後の議論で分かりましたが、アメリカと日本もAという目標や理想を有していたら、それに向かって行動をすることは共通しています。ボストンの学生はAに対して行動ができていと認識しているのに対し、日本の学生は謙遜をしこの程度の行動ではAを達成するにはまだまだ及ばないと考える傾向にあるのです。

また、議論をする際に日本人は考え方の軸がぶれるという意見がありました。A=Aであり、A=Bにはなり得ないと言及されました。それに対して武石先生は仏教には事事無礙という概念があり、時にはAもBにな

り得るという説明をしてくださいました。また、欧米では一神教の考えがあり、AはただAであり、Bにはならないという考えを知り、それが議論をする際の差異を生み出していると結論付けるに至りました。

議論や価値観の違いを根本から追求することは非常に興味深いことでした。特に宗教や文化の違いが根源にあることを実際に議論の中で学ぶことができ、実のある交流となりました。

IV 講義での学び - 国よっての価値観の違い

先述したブランダイス大学・ボストン大学での講義において、アメリカとの比較を通じて学んだ日本人の価値観やものの捉え方、その体験について改めて本章で整理します。

まず、ナショナリズムという国の在り方にはいくつかの種類があり、これに応じる形としてその国の価値観/文化が存在しています。

国民の価値観に影響を与える要因の一つには、一神教であるか多神教であるかという信教の違いが挙げられます。一神教においては「ロジック」が着目されるのに対し、多神教においてはこの「ロジック」と、物事・解を一つに定めない（定める必要がない）という思想とが共存しているのです。後者を表す言葉、それが「事々無碍」でした。ボストン大学の講義内で、革新の進む世界において伝統を重視する日本についての質問が現地の学生から投げかけられた時に私たちが戸惑いを見せたのも、伝統と革新を二者択一とする必要性がないと考えていたからであり、まさしく、こうした価値観の違いが現れていたのかもしれません。

また、日本人の感情は、事前アンケートにおいて、Anxiety, Regret, Despair, Hopelessnessが上位を占めていたことから、現地の学生とは異なるそのネガティブさについて指摘を受け、次のことが関係しているのかもしれませんが、明確な理由には至ることができませんでした。

日本人が大切にしている価値観として私たち学生が挙げたこと（modesty, cooperat, polite等）は、ブランダイス大学教授による日本人の評価（well-organized, considerate, mutually compassionate）と一致していました。一方、日本人には相手に対して自らを低く見せる特徴があり、しかしながら決して批判的/自虐的ではないということを説明するのは、非常に難しいものがありました。

ボストンでの講義により、日本人の親和性の高さについて私たちは再認識することとなりましたが、他方で、それは日本人固有のものではないということにも気づいたのです。それは、ブランダイス大学の学生との交流を通じてであり、彼らの親切心・気配り・思いやりに私たちは終始圧倒されていました。各国の価値観を知ることは、その国の人々を理解する上で極めて重要ですが、これが先入観へと変わるようでは本末転倒ということでしょう。

V. 観光

ボストン周辺の観光は、大きく分けて3つの場所に行きました。

1つ目に、Boston Tea Party Ships & Museumです。場所はボストン港のそばで、ボストン茶会事件の際の船を再現したものと、博物館がありました。ボストン茶会事件は、1773年12月16日にイギリス領マサチューセッツ湾直轄植民地のボストンにおいて、植民地人の急進派がイギリス本国議会に対する抗議として停泊中の船舶から積荷の茶箱を海に大量投棄した事件です。アメリカ史において、後のアメリカ独立戦争への転機になった出来事とされています。実際に船で当時の人々ようにお茶の箱を投げる体験ができたり、事件当時の様子を博物館でビデオ鑑賞などを通じて知ることができたりと、貴重な体験ができました。

2つ目に、旧州会議事堂です。ボストン市内のワシントン通り（Washington Street）とステート通り（State Street）の角に位置しています。旧州会議事堂（Old State House）は1713年に建てられ、80年以上にわたって使用されていた歴史的建造物です。1776年7月18日には、この建物の東側のバルコニーでアメリカ独立宣言が群衆に向けて読み上げられました。独立戦争後20年ほどの間、この建物はマサチューセッツ州の州会議事堂として使われ、現在では、旧州会議事堂は博物館となっています。そして、フリーダムトレイル(ボストンコモンからチャールズタウンのバーガーヒル記念塔まで、全長約2.5-マイル(4.0 km)にわたり、これを辿ることにより、アメリカ合衆国の歴史に関わる市内の主要な観光地16ヶ所を巡ることができるようになってい)に沿ったボストンの観光名所の1つとなっています。

3つ目に、ボストン美術館(Museum of Fine Arts Boston)です。ここはボストンで一番有名な美術館で、世界の様々な地域の美術作品が集まっています。美術館はゆっくり見て回れば1日かけてもいいほどの大きさで、一つ一つの絵の力強さや繊細さに圧倒されました。

何よりも、ボストンはどこを歩いても街並みがとても美しく、とても楽しい時間を過ごすことが出来ました。

(以下3枚写真)



振り返り

～グローバルアクティブラーニングを履修して～

グローバルアクティブラーニングという授業を通して、私たちはさまざまなことを学びました。この10日間でブランダイス大学の学生達との交流、ブランダイス、ボストン大学での授業への参加、ボストン美術館やBoston Tea Party Ships&Museum、旧州会議事堂そして、ボストンの街に張り巡らされたフリーダムトレイルなどを訪れたり参加したことにより、たくさんのことを学び、各々が考えることも多かったと思います。

私自身、今回のボストン訪問を通して今後の大学生活に大いに生きる体験をたくさんすることができました。

ブランダイス大学の日本語学科の学生との交流では学生達のあたたかさや勉強に対する熱心さを感じ、自分自身の大学生活を考えるきっかけとなりました。

私自身、英語と第二外国語であるインドネシア語に対する学習を大学生活の中で特に力を入れて頑張っているつもりでしたが、現地の学生の学習意欲に感激を受けました。

日本の大学生は何となく大学へ通っている学生が多く、日本にいては怠けてしまうことが多いですが、世界の私たちと同じ世代の若者は好奇心旺盛で、これからの世界を担う希望に満ち溢れていたため、私たちが頑張らなくてとは、良い刺激を受けることができました。

現地の学生と議論をした自国の価値観や国に対する考え方の違いについては、日本にいただけでは気がつくことのできない日本人の特性や、宗教や文化などの影響による物の考え方の差異を、肌で実感することができました。

ここで改めて外の世界から自国を見つめなおすことの大切さを学びました。

私の中で特に印象に残った事柄として、日本人は自国が好きだが、自国のために献身はしないということです。日本人は当たり前のように思ってしまうがちだが、ボストン大学の学生や先生に指摘されて初めてその矛盾しているような考え方の特殊性に気付かされました。

これがきっかけで私自身、この特殊な日本人固有の考え方に興味が湧き、自分の東南アジア研究にも活かしたいと思いました。

Boston Tea Partyの博物館やフリーダムトレイルを巡ることで、アメリカの独立のきっかけとなったボストンの歴史における重要性を学び、今のアメリカがあるのはこのボストンでの出来事があるからだと思うととても考え深かったです。学校の授業では教科書をもとに学ぶため、どこか遠くの出来事のように感じてしまい、あまり

臨場感を持って学ぶことができないですが、実際にアメリカがFreedomを勝ち取るまでの道のりを自分たちで辿ることができたことは歴史に対する認識が変わり、とても身近に感じることができました。私自身、もともとBoston Tea Partyの博物館の存在は高校生のときから知っており、いつか自分も歴史的出来事を体験したいと思っていたため、ボストンでは、とても有意義な時間を過ごすことができました。また日本帰国後、American Revolutionまでのボストンでの出来事に興味を持ち、詳しく調べ、学びを深めることができました。

このように、ボストン訪問を通して共通して言えることはたくさんのことを学び、たくさんのことを考え、日本では体験することのできない多くのことを得ることができました。そしてこれらの体験を通して、今後の大学生活がより豊かになるきっかけを多く得ました。

このような貴重な体験ができたのは武石先生のおかげであり、武石先生がこの授業を立ち上げて下さらなかったら、このような体験をすることが出来なかったため、先生に感謝を申し上げます。ありがとうございました。そして、後期のグローバル遠隔ラーニングも頑張りたいと思います。

伊藤 瑠南



